

# 中年の危機

酪農家 吉川友二

中学三年生の娘が話しかけてきた。今の時代は若者にも「ミッドライフ・クライシス」があつて大変なんだそうだ。「中年の危機」。「そろそろ死ぬ準備を始めなさいよ」と、人生の折り返し地点を過ぎたことを知らせる呼び声のことだ。

スターウォーズの最終章のヒーロー、カイロレン青年を見ればわかる。私が中学校一年生の夏にスターウォーズが始まった。そして私が五十五歳になった今年（二〇一九年）の冬にスターウォーズのお話が終わりを迎えた。スターウォーズの始まりは、スカイウォーカー青年が運命からの呼び声に、自分が住んでいる砂漠の惑星の空に広がる宇宙を期待と不安の眼差しで見上げていた。中学生の私はスカイウォーカーと一緒に宇宙に吸い込まれた。今の時代のヒーロー、カイロレンは善にも悪にもなれずに死に場所を求めて生きている。

私の中年の危機。私の場合はいつも心の問題を身体が教えてくれる。身体の方が賢いのだ。一年半前（二〇一八年六月）、頸椎症の治療のために首の切開手術をした。退院をした後も、頸椎症になった原因が全く分からない

かったので「再発をして、また同じ所を切らなくてはならなくなるのだろうか」と怖かった。

一生入院をしない人もいるのに、手術をしなければならぬような病気をするのは、おかしくはないのか、と思った。それから少しして、今度の病気の原因は、許せないという思いではないか、と気が付いた。そして、また少しして、「自分は「愛」として今ここにあることができるのなら、頸椎症が再発してもいいし、いつ死んでもかまわない」と思えるようになると再発の恐怖が消えた。その時の「愛」の意味は、何かをするということではなくて、「ところがポカポカしている」このころの状態であると理解していた。

この心の変化で、自分の身の回りに起こることも変わってくるのではないかと、それからちよつと期待しながら過ごした一年であった。

### 自転車日本一周の旅

冬休みを利用して沖繩から北上をしている日本一周の自転車の旅も八回目となった。今回（二〇一九年）の自転車の旅は三重県の津市から和歌山市まで紀伊半島を走った。前回は瀬戸内海の岩国から山陰を北上して、津和野まで走った。日本海側を出雲へ向けて走るのは雪の降る可能性が高いので、今回は太平洋岸を旅することにした。

今まで子供も一緒に走ってきたが、今回は初めての一人旅となった。自転車の旅が一年に一度の一大イベントで子供たちも盛り上がっていたが、前回の旅を終えた時に、次の旅は一緒に行かないと言われていた。一番下の子も小学六年生になって、私の子育ても一つの区切りがついたのだろう。

この旅は子どもと一緒に時間を過ごすということも大きな目的だったので、旅を止めようかとも思う。でも自転車日本一周の旅は私の夢である。子供たちがいるいには関係がない。

旅の準備をしていると、自分一人だけの旅ということ、今までになかった緊張がある。子どもが一緒にいることがかえって心強かったのだ、ということに気が付く。緊張のためか、旅に出発する前から日常の時間の流れの中に、旅の時間が流れ始めたのを感じる。

### 十二月十八日出発

朝、今日の市場で売る予定の牛二頭の牛乳を搾って、五時半に家畜車に乗せる。二頭以外の牛の四十頭は昨日のうちに乾乳（子牛を産む二か月前にお乳を搾らないで乳房を休めること。）に上げてしまっていた。

仕事着を着替えて車に乗る。自転車を入れた袋と、旅の荷物を入れた大きなバックは昨日の内に車に積んであ

る。途中、音更のツタヤに寄ると『二〇一九年ツーリングマップル関西』が運よく置いてある。帯広のバス会社を置いて、千歳空港行きのバスに乗る。バスの中では旅の情報誌を読んだり、ウトウトしたりする。二月の終わりに始まった搾乳も今日で終わりである。

中部国際空港セントレアに着陸する。津エアポートラインというフェリーですっかり暗くなった海を一時間弱かけて津市へと伊勢湾を渡る。

## 十二月十九日

初日はホテルで朝ごはんを食べて、明るくなってから出発をすることにする。玄関に置いておいた自転車の番号式のチェーンの鍵を開けようとするがいつもの番号で開かない。ホテルのフロントにワイヤーカッターなどあるのだろうか？番号一つ違いでするりと開く。ラッキー！これもお伊勢さんが、私が事故に合わないようにと時間調整（私のところのお師匠さんの斎藤一人さんの言う「神様の時間調整」…お財布を忘れたら、ゆつくりと取りに帰ればよい。神様が事故に合わないように時間調整をしてくれているのだから、あわててはいけないよ、という教え）をしてくれたんだと考える。自転車をこいでいると、お伊勢さんに引き寄せられているような気がする。

お伊勢さん参りについては、前野獣医から何度もお話をきいていた。足寄神社の神主さんからもお話を伺っていた。斎藤一人さんが身体を悪くしたときに、神様があらわれて、神宮にいらつしやいと言われた。両脇を支えられてお参りをする、それから病気が快方へ向かったという一人さんのお話を聞いたこともあった。そのようなわけで神宮へ行くことをとても楽しみにしていた。

伊勢市のにぎやかな市街地に入って意外にも迷う。神宮下宮（げぐう）に着いて、自転車をどこに置いたら良いのだろうか、大きな地図看板を見上げてみると、衛士（えし）の方が見張所から出てきて見張所の脇に置いておかせてくれる。

お伊勢さん鳥居をくぐると、杉の巨木たちに圧倒される。先進国の中で自然崇拜多神教の宗教が残っているのは日本だけだと聞いたことがある。私たちの宗教心はどこから生まれてくるのだろうか？宗教心とは生れつきに教わらなくても、心の中に備わっているものなのだろうか？

天皇家がこの神宮を祭る前から杉の巨木の森だったのだろうか？もともとは伊勢の豪族の神様を祭る場所だったのだろうか？それともただの原生林だったのだろうか？原生林ではなくて神宮の建物を建てるために杉を植えた人工林なのだろうか？そんなことを考えながら神宮を巡

る。

下宮から内宮へは四キロある。途中にある猿田彦神社をお参りする。前野さんから猿田彦神社から先にお参りをするように順番を言われていた。

内宮へと渡る五十鈴川の橋の下にアオサギ？が一羽いる。この橋は異空間への懸け橋である。橋を渡ると下宮と同じように杉の巨木の森になる。

お参りが終わって、門前町の「おはらい町通り」へ行く。年の瀬のせいかな観光客が少ない。あんこが大好きな私は、お土産は「赤福」にしようかと決めていたが、赤福のお店で足寄町への発送はできないと言われてしまう。

美味しいお豆腐料理屋さんがあると前野さんに聞いていた。わかりづらい所にあるそうだが、見つかったらそこでお昼を食べようと思いついたが、見つかったらそこで閉まる二時少し前にお店がみつかる。和風建築の凝った造りの建物で、通りから少し離れて、五十鈴川を見下ろすところにある。たぶん先ほどのサギだろう、鴨の群れの中にサギが一羽いる。

伊勢から鳥羽へ向かう道は主要道であるはずだが、入り口が分からなくて地図をにらみながら、同じ道を何度も行ったり来たりする。車がすれ違うのがやっとなような道に小さな③の看板があるのを見つける。

三十七号線は朝熊川を鉄道と共に縫うよう走り、車通

りもない。あまりにも静かな道なので、いつもの旅ではうるさく感じる子供たちの喧嘩や騒ぎ声が聞こえないのがさみしくなる。

四時五分前に鳥羽水族館に到着する。四時に入館の締め切りになると言われる。入るか迷うが、水産学部の卒業だということで入ることにする。閉館間近の水族館には、小さな子供を連れた家族が五、六組いて、広く感じられる。

『ツーリングマップル』を見ると、近くの鳥羽安楽島にテントの印が載っている。自転車で印を目指すが、キャンプ場が見つからない。安楽島でのキャンプはあきらめて、すっかり暗くなった道を『マップル』の次のテントマークがある夏見へ自転車を走らせる。天気予報にはなかった雨がポツポツと降ってくる。閉まっている夏見のキャンプ場のゲートを開けて入り、管理棟の前の看板に書いてある番号に電話をする。やってきた管理人に「不法侵入だ」とさんざん油を搾られる。

夏見はキャンプ場も駄目だったので、雨が降り続ける真っ暗な道を、どこか道端でテントが張れそうな場所がないかと探しながら走る。「俺のようなことを「観光公害」と言うんだな」と、自転車をこぎながら頭の中はどんどん弱気になる。地図を読み間違えて道を曲がってしまい、自分が今どこにいるのかもわからなくなる。

「海の博物館」の看板を見つけて砂利の山道を博物館を目指す、いまだに自分がどこにいるのかわからない。何とか博物館に着いて、駐車場にテントを張る。ご飯を炊こうとするが、途中で水を補給し忘れて水がない。水の代わりに水筒に残っているお茶でご飯を炊こうと思うが、ガスコンロのカートリッジガスを買うのを忘れていることに気が付く。ご飯を炊くときに中に入れるために作ってきたペミカン（ひき肉を塩・コショウ・ラードで炒めてから冷やして固めた保存食）をかじって寝る。

十二月二十日

まだ暗い内に出発をする。迷いたくなかったので、海岸沿いの道ではなく、パールロードを伊勢志摩を目指して走る。英虞（あご）湾に出たからは、海岸線の道を行くことにする。

紀伊半島はリアス式海岸でギザギザに入り組んでいる。道は浦（入り江）と岬とを繰り返しながら進んでいく。浦の平らな道を過ぎると、海から切り立った崖になっている岬にぶつかる。海岸沿いは崖で行けないので、その岬の手前で道は上りになる。そしてトンネルがあらわれる。トンネルをくぐり抜けると道は下りになる。それから新しい浦に出て道は平らになる。こんなに交通量の少ない所に不釣り合いな立派な道やトンネルがあった

かと思うと、突然車がすれ違えないような細い道になったりする。

「紀伊長島マンボウ道の駅」でテントが張れないかと期待していたが、道の駅の看板にテント禁止と書いてある。『マップル』の古里にはテントマークがついている。道の駅の事務の方に、古里のキャンプ場は開いていると聞いてほっとする。

キャンプ場に着くともう真つ暗である。電話をすると、観光協会の方が来てくれる。地元の旅館・料亭「うまし宿 漁亭 美乃島」の奥様で、夕食準備の忙しい時間である。こんな閑散期にキャンプ場をオープンしていかれて本当にありがたい。是非また来てその時は旅館に泊まります。

海岸の砂浜の真ん中にテントを張ると、さほど強い風ではないと思っていたが、テントが転がり始めてあわてて追いかける。

温泉が近くにある。お客がない静かなお風呂に入る。番台のお母さんに定食屋の「秀」を紹介してもらって行く。今日は花の金曜日。地元のお客さんにぎやかだ。日替わり定食が美味しい。寝る場所も決まっているし、今日は天国だ。

テントに帰って明日の朝ごはんを炊く。ご飯を炊くコツヘル（鍋）をコンロの下にひっくり返さないように、片

手で持ちながらゴロゴロとする。

こんなに素晴らしい天場で、暗い時間について、明日の朝暗い内に出発するのはもったいない。

十二月二十一日

朝、ヘッドライトを点けて出発をする。浦と岬の上りと下りを繰り返して、今日最初に目指すのは尾鷲（おわせ）湾である。尾鷲湾の海に沿って走る道を選んで、幹線道路を離れる。途中「熊野古道センター」の看板を見つめるが、熊野古道に全く関心がなかったので通り過ぎしてしまう。子供たちがいたら、子供たちのブーイングを無視してでも教育パパの私は立ち寄っただろうに。

尾鷲湾は瀬元鼻という名前の岬で終わる。この岬の崖を道が上り始めるところで工事をしている。通行止めの立て札があり、狭い道は小型のショベルですっかり塞がれてしまっている。

ここから引き返しか、残念。ダメもとで声をかけてみると監督さんと人夫さんの二人が現れる。北海道から来たというとは非この道を走ってくれと言って、二人で自転車車を前と後ろから持ち上げて、パワーショベルと道の側面の崖との隙間を運んでくれる。

そこから上は道に落葉が降り積もっている。上りはいいけれども、下りは滑って危険だろう。何年か後には落

葉が降り積もって道が消えて森に戻りそうだ。こんな道を走れるのも自転車旅の特権だ。工事の方ありがとうございました。

浦と岬を何度も越えて熊野市に出る。熊野市から新宮市までの熊野灘（灘とは潮流が激しい、風浪が激しいなど航海の難しい所を言う）。この道だけが紀伊半島では唯一平坦な海岸線になっている。

海岸線に日本最古の神社「花の窟神社（はなのいわやじんしゃ）」がある。石を投げて窟の巨石の窪みに乗ればよいことが起きるのだと、小さな女の子二人を連れのおじいちゃんが石を投じている。自分もやってみるが、見た目以上に難しい。

新宮市を素通りしてしまうのは残念だったが、水産学部 of 北農寮の友人の菅井の住む那智勝浦を目指す。

十二月二十二日

五十五歳の誕生日である。天気予報は午後から雨。いつもなら雨の中だろうと走っているだろうが、今日は特別な日。いつもの自分ではないことをする。運よく日曜日で菅井もお休みである。菅井の車に自転車を乗せてもらって、菅井のふるさとを、彼の幼い時の思い出と共に案内してもらおう。

まずは那智の滝。那智の滝へ通じる熊野古道が車道に



沿ってある。熊野古道は世界遺産に指定されるまでは苔むした道であったそうだが、今は踏まれて苔が無くなってしまうそうだ。

熊野古道の大門坂の近くの道の脇に車を停めてくれて、熊野古道を見に行く。古道の両脇を杉の大木が覆っている。道だけど、神宮と同じ空気が流れている。二〇一年の台風で、那智の滝もそれから下の町もだいぶ被害があったそうだ。

那智の滝から、街まで降りてきて補陀落山寺（ふだらくさんじ）へ。渡海船（とかいせん）の実物大のレプリカが展示されている。このお寺の僧が観音様の住む補陀落山を目指して、生きたままこの船に乗って海に流された。二十数回にも上るそうだ。伊勢詣で、熊野詣でと観光を楽しんでいるけれども、宗教とは命懸けのものなのだ。

菅井がどうしても外せないという本州最南端の潮岬（しおのみさき）へ。ここも年の瀬のせいか、ほとんど人がいない。悪天候のせいもある、荒涼としている。岬の芝は毎年一月に弓道部の女子高生が火をつけた弓矢を放って野焼きをするのだそうだ。

岬にある南紀熊野ジオパークセンターに入る。今年オープンしたばかりだそうで、熱心な館員の方が展示の一つひとつを解説して歩いてくれる。紀伊半島の地質学的な

成り立ちが分かるように展示にも力が入っている。

次に訪れた白浜はアドベンチャーワールドのパンダが有名なそう。時間が押しているので、岬の先端にある「京都大学白浜水族館」はカットして、そのすぐ上にある「南方熊楠記念館」を選んだ。熊楠さんの博覧強記・酒乱・猥雑さ・自然を守るための暴力を見て、大木のような過剰なまでの生命力、エネルギーを感じる。ふと外を見ると、館

の大きなガラスでできた壁に雨が打ち付けている。

田辺市にあるゲストハウス (Garden DAL Giovanni) をスマホのアプリで予約する。田辺市街にあると思っていたら、これは自転車では絶対に来ないぞと思うほど山へ登って行ったところにある。

誕生日を祝うために途中のコンビニでブッシュドノエル（クリスマス用のケーキ）を買っておく。着いてみると、オーナーはイタリア人である。お客さん二人も外国人。オーナーのジョバンニと台湾人のシンディとジャマイカ人の若者と、イタリアの白ワインを開けてハッピー



バースデーを歌う。

十二月二十三日

朝七時、明るくなつて昨日は真つ暗で見えなかつた海を見はるかす。ジョバンニさんがワイン用のブドウを植え始めたばかりのブドウ畑が家の上にある。

こんな傾斜の山の上までよく開拓が入つたものだ。住宅が近接した集落で、近くには廃校まである。

今日は自転車で走ると今回の旅で始めて手がかじかむ。昨日降つた路面の雨はギリギリ凍つていない。寒いけど下るだけなので、気が楽だ。急斜面に葉を落とした幹の太い木が植えられている畑が次から次へと現れる。ミカンの木？ だったら今でも実と葉がついているはずだ。…梅だ！ 道にあるマンホールの蓋のデザイン、これも梅だ！ この梅のお陰でこんな山の中に集落があるのだと、山の集落の謎も解ける。

山を降りて平地を走り始めると、信じられないほど大きなネジ釘がタイヤに刺さつてパンクする。田辺市に比べたら十分の一位の大きさにもかかわらず、隣のみなべ町には「日本一の梅の里」の看板がある。急傾斜地で耕作をするミカン農家も梅農家も大変であるが、梅農家は梅を梅干しに加工して付加価値を付けることが出来るのでミカン農家よりも有利だと思う。梅干しなら一つ

ぶ五百円近くで売っているものもある。梅干しを買つて、梅農家を応援しようと思ひ、梅干し屋さんへ寄つてお土産を買うことにする。

梅干し屋さん置いてあつたパンフレットによると「みなべ・田辺の梅システム」は二〇一五年に世界農業遺産に認定されている。養分に乏しく崩れやすい斜面を活用して薪炭林を残しつつ梅林を配置し、四百年にわたる高品質な梅を持続的に生産してきた農業システムが評価をされたのだそうだ。南高梅と紀州備長炭が密接に結びついていゝとは知らなかつた。備長炭の原料になるうばめがしの薪炭林に住む日本ミツバチを利用して梅の受粉をするのだそうだ。そんな先人の知恵であんな急傾斜地の山の中に立派な集落があつたのだ。

日ノ御崎（ひのみさき）への曲がりくねつた急坂をひたすら行く。切り立つた岬のてっぺんには立派なホテルやアメリカ村の博物館の廃墟が建つてゐる。ここから先を行こうとすると道がふさがつてゐる。地図を見ると道は岬の突端で行き止まりになつてゐる。あきらめきれずに本当にここから先に行けないのかスマホまで出して 구글マップを調べてみる。ここは紀伊半島と四国が一番近くなるところだそうだ。見下ろしている海は紀伊水道である。引き返しは、下り坂でさえ長く感じた。

湯浅の狭い道の脇に「日本最古の醤油屋」という看板



が立っている。明恵上人のゆかりのお寺ということで、施無畏寺へ行つて見る。お寺の名前は「怖れのないころをほどこす」という意味らしい。明恵上人と同じ場所に立っているという不思議を感じる。大学を卒業して農業で生きていくことを志して斜里町へ行つた時に河合隼雄（ユング派の心理学者）さんの『明恵夢を生きる』をちょうど読んでいた。そして印象的な夢をいくつか見たこともあつて、明恵上人は私の農業へかけたした時の夢とも結びついている。

夜も暗くなつた六時に海南市の三上農園（柑橘類の栽培）に着く。暮の出荷でお忙しい所に突然現れたのに三上さんが来てくれる。そして手の空いた人から夕食が始まる。近くに住んでいる娘さんや千葉県に住んでいる娘さんや滋賀県に住んでいる娘さんご夫婦がお手伝いに来てくれる。ご飯を頂きながらにぎやかにお話をする。中学二年生のお孫さんの娘さんも帰宅する。

妻の大学時代のお友達のとみさんが三上さんの娘さん



の幼馴染で、ひとみさんが三上さんのミカンを足寄に送ってくれたのが縁でお付き合いが始まった。三上さんが八十歳と聞いてびっくりする。六十代にしか見えない。柑橘類を食べているせいだろうか？ここに張りがあるからだろうか。

#### 十二月二十四日

のんびり起きて、荷物をまとめていると、電車であれば高野山まで行けるんじゃないかと思いつく。もっと早く気が付いていたら、早起きしたのに。私の生まれた上田市の城下町を造つた真田昌幸・信繁（幸村）親子が関ヶ原の合戦の後に流された九度山までだったら行けるかもしれない。

車窓からの景色を味わう。スマホで時刻表を調べると時間が足りないことに気が付いて、奈良県との県境となる橋本駅で降りる。帰りの電車の来るまでの三十分間、紀ノ川まで散歩をする。「前畑ガンバレ」で有名な一九三六年ベルリンオリンピックで平泳ぎ金メダリストの前畑さんが飛び込んで泳いだところに看板がある。

紀ノ川はすぐ隣の奈良県では吉野川と呼ばれていることを旅から帰ってから知った。子どもの小学校の地図帳を広げてみると、紀ノ川はほとんど直線に川が流れている。直線の川といえば四国の吉野川である。もしかやと紀

伊半島と四国が同時に載っているページを開いてみると、紀ノ川と四国の吉野川は真つすぐ直線に向き合っている。間違えて上った四国に一番近いという日ノ御崎に向けて四国からは蒲生田（かもだ）岬が手を伸ばしている。この対称的な地形は九州まで続いている。

和歌山駅前から十一時のリムジンバスに乗って関西空港へ。空港の売店で赤福を見つけてお土産に買う。『21 Lessons 二十一世紀の人類のための二十一の思考』（ユヴァル・ノア・ハラリ）という題名の本が本屋で平積みされている。『サピエンス全史』で人類の過去を振り返り、『ホモ・デウス』で人類の未来を予告した本を書いた著者であることは知っていた。新しく出版されたこの本では現在の人類の課題について書いている。トランプ大統領、安倍首相のように自分にとって利益のある人たちだけを優遇して、国民を分断してしまうような政治家たちが、なぜ政権運営の座に選ばれるのかが不思議でならない。今の時代に対する不思議にどんな答えをしているかを知りたくて買う。

関西空港から千歳空港に着いてから、帯広行きのミルキーライナー（バス）までの時間があるので、帯広で下宿生活をしている高二の長男のためにクリスマスケーキを買って行ってやろうと思う。あちこち探してもケーキはどこにもなくて、「きのとや」のお菓子にする。

さて、お菓子も手に入れたしハラリ氏の本の続きを読もうとすると、本がない。本をどこかに置き忘れたらしい。いい値段だったので残念だが、「この本は今読まなくてもよい」ということだと解釈をする。西田幾多郎さんについての若松英輔さんの本が面白かったので、同じ若松さんの「永遠の今を生きる者たち 内村鑑三『代表的日本人』NHKテキスト 百分de名著」を電子書籍で買う。

帯広について元の下宿にいくと、友達三人とたこ焼きパーティーをしている。

我が家のクリスマスにも間に合うようにと車を走らせる。

### 『善の研究』

柏久（かしわひさし）さんから自著の献本が届いた。本の題名は『李登輝の偉業と西田哲学 —台湾の父を思う—』（産経新聞出版）である。第一刷の発行が二〇一九年十月二十五日であるので、本が届いたのもその頃であらう。

柏さんは京大を退職された農業経済学者である。柏さんとは二、三度足寄町でお会いしたことがあった。『放牧酪農の展開を求めて —乳文化なき日本の酪農論批判—』柏久編著（日本経済評論社）という本を書くための取

材に來られていた時である。この本の第一刷の発行が二〇一二年八月十五日であるから、二〇一〇年から二〇一一年に柏さんにお会いしていることになる。

本の題名を見て頭の中に大きな「？」が浮かんだ。中華民國（台湾）の元総統の李登輝さんと明治の哲学者の西田幾多郎（きたろう）さんとの間にどんな繋がりがあるのだろうか？高校生の時に教科書で西田さんは『善の研究』という本を書いた哲学者であることは知っていた。

柏さんが癌だと人伝いに聞いていたので（二〇一四年七月胃癌のため胃の全摘手術）、早く読んでお礼を書かなければと、哲学書などは何年も遠ざかっていたが、読み始めてみる。すると久しぶりに知的興奮を覚えた。

本の内容を紹介する。

李登輝（一九二三年生まれ・一九四三年京大入学四十二年学徒出陣・農業経済学者・中華民國（台湾）総統一九八八〜二〇〇〇年）さんが、政治的な問題からビザの取得に苦労をして、二〇〇四年にやっと日本を訪問した。その大晦日に京大の学生であった時の恩師の柏さんのお父さんの祐賢（すけかた）さんを訪ねて六十一年ぶりの再会を果たした。その時の場所が柏さん（当時五十七歳）のご自宅であり、柏さんは初めて登輝さんに出会った。

柏さんは登輝さんの存在感の大きさに今までの人生が大きく揺るがされた。柏さんのお父さん（一九〇七年生

まれ・三十三年京大卒・京大教授・農業経済学者・二〇〇七年三月十二日ご逝去）は「百年経つても師弟は師弟だが、この人は天下人だ」と登輝さんに笑いかけた。

これほど深く二人が結びつけられたのはなぜだろうか？柏さんは二人とも西田幾多郎（一八七〇年生まれ・一九一〇〜二八年京大教授・一九四五年没）さんの哲学を学んで、実践していたからであると考え。そして登輝さんが総統として台湾の民主化という偉業を成し遂げることが出来たのも、西田哲学を哲学すること（＝愛知）によってもたらされた使命の力であると考え。

次に、柏さんが登輝さんを「台湾の父」と呼んでいるのはなぜか？二〇〇七年に柏さんのお父さんがなくなられたときに登輝さんは弔辞を寄せている。二〇一四年九月には、二か月前に柏さんは胃の全摘手術を終えたばかりであったが、日本を訪れていた登輝さんに呼ばれて会いに行く。その時、登輝さんの人には思いもおよばないような深い愛情に触れたからである。

その日から登輝さんを父として、彼の教えを広げること、またそして柏さんのご専門の農学哲学を通して農学・農業に変革をもたらし、より良い社会の実現のために尽くすという使命がもたらされた。

この本を読み終わって、西田哲学についてもっと知りたくなって「NHKテキスト百分de名著 西田幾多郎

『善の研究』（若松英輔）を電子書籍で見つけてダウンロードする。瞬時にして読みたい本を読めることが電子書籍の一つの良い所である。

まず「善」とは何か？「善」とは「真の意味で「自分」であること」である。若松さんによると、本を読むことも生きることも正しいこと知ることではなくて、意味が深化していく過程を経験することなのだそうだ。「真の自分」とは何か、「善」とは何かを経験することが生きるということなのだろう。

柏さんは本文中で登輝さんの言葉「我是不是我的我（私は私ではない私である）」を紹介している。それは何を意味するのだろうか？以下は若松さんの本をもとにしているが、文責は私（吉川）である。

「私は私ではない私」とは、本当の「私」は私が思っているような「小さな私」ではありませんよ。という意味ではないだろうか。「∴我々は小なる自己をもって自己となす時には苦痛多く、自己が大きくなり客観的自然と一致するにしたがって幸福となるのである。（西田幾多郎）」。

「客観自然」を西田さんは「神」とも呼んでいる。西田さんによると、宇宙と我われの根本は「神」である。そして「神人合一」するときに「愛」があらわれる。生きる意味とは「神」を生きてみるという「実験」を実践

するところにある。登輝さんの場合はキリスト教徒なので、キリストと合一した私が真の私なのだろう。

柏さんは登輝さんの「誠実自然」という言葉も紹介している。大学を卒業して、農業を志してリュックサック一つ担いで、斜里町を目指した時、「自分は自然とはなにかがわかったら死んでよい」と決意していた。登輝さんのこの言葉の意味は、「自然」は「神」を意味するのではなく、「権力者になつても人々に対して誠実で、肩肘張らずに自然体でいたい」というもつと軽い意味であるのかも知れない。

今まで、私は「自然」とは自分の外にある世界のことだと思っていた。しかしこれからは自分の中と外に「自然」を探していかなければならないことに気が付かされた。

柏さんの本にお父さんの言葉が紹介されている（百九十一ページ）。「そこに何か大きな力を見出すところぞ、君の主体性なのだ。だから君の語ったことは、まさに私の主体性理論の証明なのだ」。

今年始まった私の流行は、Twitterで自転車をこぎながら、Audibleを聞くことである。

今まで朗読本をCDで買っていたが、朗読本も電子化されてAudibleでボタンを押すとすぐにインターネット

で聞くことが出来る。Twitterとは、屋内のローラー台に自転車を乗せてこぐことでパワーを換算してコンピュータの画面で自分の自転車が走り出す。そして世界中のローラー台で自転車をこいでいる人とコンピュータの画面で一緒に走って楽しむ遊びである。

旅から帰って来てまず空港で失くした『21 Lessons』をAudibleで聞き始めた。最後の二十一番目のレッスンは「瞑想」であった。朗読本なので、以下に書くことは私の聞き取りが正しければということ。ハリリさんの責任ではありません。ハリリさんは二〇〇〇年から一日二時間瞑想をしている。瞑想をするまでは、自分は自分の最高責任者であると思っていた。しかし、瞑想してみると、すぐに気が散ってしまった。自分の呼吸を観察することさえころころ（マインド）はできない。マインドとブレイン（脳科学）から人間、自分を理解しなければならぬ。自分とは何か、人間とは何か、もわからないのに、人工知能が自分とは何か人間とは何かを決めてしまう時代が今すぐそこに迫っている。

瞑想をすることによって、『サピエンス全史』も『ホモ・デウス』も生まれてきた。

真の「私」とはなにか？臨死体験から学ぶことがあるのではないか。アニータ・ムアジャーニさんの（『Dying To Be Me』『喜びから人生を生きる』）を聴くことにす

る。Dying To Be Meとは「私になるために死ぬ」「死にたいほど私になりたい」といった意味だろうか。

私の聞き取りなので以下の文責も吉川です。アニータさんは癌の末期症状で臨死体験をした。死ぬとは、まるで眠りから覚めて、すべてがはつきりと見えるようになる感覚である。過去・現在・未来の時間と、すべての空間が同時に今ここに存在して認識できる状態である。

そんな体験をしたアニータさんによると、「私」とは宇宙の中心であり宇宙そのものであり「愛」である。「私」に足したり引いたりするものなど何もない。

彼女のアドバイスは、人の期待に応えようとしないこと。ありのままの自分を無条件に愛してあげること。自分を表現することを恐れないこと。自分自身をそして人生を真面目に考えすぎないこと。今日一日をいっぱい笑って過ごすことである。

私もハリリさんにならって瞑想を始めてみよう。今まで五十五年生きてきて垢のようにこびりついた価値判断の大掃除・断捨離をしよう。そして今ここを深く味わい身軽に行動しよう。